

川崎市は市制施行されてから今年で 90 周年を迎えました。

現在の川崎市は利便性に優れ、多くの高層ビルが立ち並び、人口も 145 万人を超える近代的な都市としてさらなる発展を続けています。

そんな川崎市も時代背景に沿ったさまざまな変遷があり、多くの問題や苦勞を乗り越え現在に至ります。

それでは川崎市の 90 年を過去の資料と照らし合わせながら振り返ってみましょう。

川崎市は大正 13 年 7 月 1 日に川崎町、御幸村、大師町の合併により誕生しました。

その後、昭和 2 年に田島町、8 年に中原町、12 年に高津町と日吉村、橘村、13 年に稲田町、向丘、宮前、生田村、14 年に柿生、岡上村が編入されました。この他、臨海工業地帯の埋め立てなどによって大都市に発展しました。

それに伴い交通網も整備され、市制前は国鉄、京浜電気鉄道しかなかった路線も、つぎつぎと敷設(ふせつ)されて行き、市制後から昭和 5 年までのわずか数年間で現在とほぼ変わらない鉄道網が形成されました。

市内では乗合自動車が行き交い、小美屋デパートがオープンするなど都市としての機能も整ってきました。

この急速な発展の背景には、国家の軍事費増大により、重工業を中心に工場の増設が相次ぎ、工業地帯も南武鉄道沿線を伝い市内へと広がっていきました。

昭和 16 年、第二次世界大戦に突入すると、「工都川崎」は軍需生産に追われ、生活必需品の生産量の減少により物価の高騰を招きました。

昭和 19 年、戦局の悪化により空襲が激化してくると、市民の疎開が進められました。

そして、昭和 20 年 4 月 15 日川崎大空襲により、川崎市は壊滅的な被害を受け、市街地は焼け野原となって終戦を迎えることとなります。

終戦後、市は復興計画を発表。その内容はもう一度「工業都市」として道を歩もうとするものですが、その道は決して平坦ではありませんでした。

当初、壊滅的な被害を受けた工場からの税収は見込めず、支出は多いのに収入は少ないという深刻な財政状態でした。この事態を乗り越えるべく、川崎港市営埠頭の建設事業化や競輪、競馬の開催をすることでこの危機を脱していくこととなります。

進まなかった街の復興も昭和 24 年には多摩川大橋が架橋、翌 25 年に市営バスが営業開始、さらに翌 26 年には川崎港が開港されるなど、市民の生活や街並みも徐々に改善を見せ始めました。

「工業都市・川崎」は市制ひかれて満 30 年、人口すでに 41 万、著しい発展ぶりを見せています。また、毎日 15 万人もの客を扱う川崎駅の前には 5000 坪の立派な広場が完成。近代都市としての面目を、いかに発揮しています。

そして昭和 30 年には国体を開催。

川崎スタジアムでは国体開会式ののち、市内各学校選抜の学生達によるマスケーム。

バレーでは鋼管チームが準決勝で専売公社と対戦。2 対 1 で惜しくも敗れました。

新装の公民館には天皇、皇后両陛下もご臨席。日本新記録を樹立した南部選手などの健闘を熱心にご覧になりました。

昭和 30 年代初頭の日本は「神武景気」「岩戸景気」と呼ばれる大型の好景気が続き、川崎市も高度経済成長の時代に突入していきます。

臨海部では埋め立てによる新たな工業用地の造成が進み、1 大コンビナートとなり日本の高度成長を担う「京浜工業地帯」の中核として発展しました。

人口も増え続け、昭和 32 年には 50 万人を突破。

川崎市立川崎病院は大規模改修を経て、総合病院となりました。

また、開発が遅れていた一帯でも交通インフラが整備され「百合ヶ丘団地」が誕生するなど大型住宅団地の造成が進みました。

百合ヶ丘団地の第一期工事が完成しました。商店もつぎつぎと店を開いており、近く 8000 人のニュータウンが誕生します。

このころになると市民の生活はゆとりや活気が感じられるようになっていきます。

向ヶ丘遊園地を一日子ども達に開放して、「川崎市子供遊園会」が開かれました。

園内は一日中子どもたちの明るい笑顔と元気な声があふれていました。

人口が増えることによって大都市としての問題も出てきました。

一日の乗降客は約 32 万、東京鉄道管理局内では新橋に次ぐ数字です。

交通量増加による「渋滞」、「交通事故の増加」、上下水道の整備拡張や市街地整備による「自然環境の減少」、

昭和 20 年代から続く工場からの「ばい煙」などによる「健康被害」などです。

工場街の近くにある、火の見櫓(ひのみやぐら)のガラスは泥水をかけたように汚れ、監視員はメガネなしでは監視もできません。

昭和 40 年代になると市は発展を続けながらも、こうした問題解決に積極的取り組み、これまでの生産・経済優先の「工業都市・川崎」から、「市民生活優先の川崎」へと政策変換していきます。

お年寄りが身近な場所で楽しく過ごせるようにと、市内 4 か所に「老人いこいの家」が、また、「こども文化センター」が高津区宮崎に完成。それぞれオープンしました。

その中で時代と共に無くなっていくものもありました。

昭和 40 年代中頃から公害対策をさらに強化。

公害病に認定されている小中学生を対象に、はじめての「夏休みぜんそく教室」を富士山麓で開きました。

また、昭和 47 年には日本初の精神障害者社会復帰施設が開設。

同年 4 月、札幌、福岡と共に政令指定都市となり、川崎、幸、中原、高津、多摩の 5 つの区に分けられ、翌 48 年にはついに人口 100 万人を突破しました。

市長が訪問して「市民の鍵」を送り、祝いました。

昭和 50 年代に入ると国際化が急速に進展し、昭和 52 年リエカ市(クロアチア)を皮切りに、平成 8 年までに海外の 8 都市との姉妹・友好都市提携を結び、それに伴う市民間交流も盛んに行われるようになりました。

昭和 53 年には記念すべき「第一回川崎市民まつり」が開催されました。

三日間の人出が 50 万人を超えるという盛況ぶりでした。

昭和 57 年 7 月、高津区から宮前区が、多摩区から麻生区が分区して現在の 7 区制になりました。

昭和 59 年、情報公開制度の運用開始。昭和 60 年代にはアゼリア地下街のオープン、チネチッタの開業、川崎市民ミュージアム開館など、より豊かな生活を目指し、まちづくりが進められました。

時代は昭和から平成に変わり、市は新時代へ向けて都市づくりの基本方向を示し、それに沿った施策やインフラ整備を行ってきました。

「FANTASY かわさきインナイト」では川崎駅を中心に、街をイルミネーションで飾りました。

平成 7 年、日本初のごみの鉄道輸送開始。平成 8 年は市民と共に歩む施策を実施。

平成 9 年には高津区にノクティがオープン、Jリーグ「川崎フロンターレ」の誕生、東京湾アクアライン開通、カワサキハロウィン開催など、現在の川崎を象徴するものの多くが誕生しました。

平成 11 年、川崎が生んだ鬼才、岡本太郎氏の作品を集めた美術館がオープン。

生田緑地ばら苑は向ヶ丘遊園地の跡地につくられました。

平成 15 年には子どもたちが自由に学び遊べる活動の場「子ども夢パーク」がオープン。

平成 16 年、川崎市のシンボルともいえる「ミュージア川崎シンフォニーホール」がオープン。これを期に、「おんがくのまち・かわさき」「スポーツのまち・かわさき」「映像のまち・かわさき」と街行く人々の心を豊かにする施策をつぎつぎと打ち出し、その取り組みは現在も続けられています。

平成 18 年鷺沼プール跡地にカッパーク鷺沼が、川崎駅西口には大型ショッピングモール「ラゾーナ川崎プラザ」などさまざまな施設がオープンしていきました。

平成 19 年、アメリカンフットボールのワールドカップを開催し、この頃から国際基準の大会やスポーツイベントがさかんに行われるようになりました。

平成 22 年に JR 横須賀線・武蔵小杉駅が開設、「芸術のまち」新百合ヶ丘駅周辺ではアルテリッカしんゆりが開催されました。

平成 23 年には川崎駅東口駅前広場が再整備されるなど、進化を続けていた矢先、3 月 11 日、宮城県沖を震源とした東日本大震災が発生。

川崎市内にも多くの被害をもたらしましたが、迅速な対応で乗り越え、また市全体で被災者支援にも積極的に取り組みました。

そんな状況の中でも、新産業創出を目指す「殿町国際戦略拠点キングスカイフロント」の整備や国内最大級の太陽光発電所の建設など、川崎市は歩みを止めることなく進み続けました。

9 月には藤子・F・不二雄ミュージアムがオープン。

11 月には世界 3 大ジャズフェスティバルの一つ、モントルー・ジャズ・フェスティバルを開催。

平成 24 年には世界最高峰のプラネタリウムを有する青少年科学館が宙(そら)と緑の科学館としてリニューアルオープン。また研究開発拠点「新川崎・創造のもり」に、最先端技術の研究施設が開設。

そして…

今、川崎市は新たなる未来への一歩を歩み始めています。

これからの川崎市は、90年に渡る歴史や経緯をしっかりととらえながらも、これまでの発想にとらわれない柔軟な知恵と工夫とやる気をもってさらなる高みを目指し、進化を遂げていきます。子どもたちの笑顔が、10年先、20年先にも、まちにあふれるために…。